

『資本論』第1巻第1章「商品」

第1節「商品の2つの要因—使用価値と価値（価値実体 価値量）」

2016年05月06日

柴崎慎也

【要約】

■prg.5

- ・交換価値は、ある1種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係として現れる。
  - ⇒ この関係は絶えず変動するため、商品に内在的な交換価値というのは形容矛盾に見える。

■prg.6

- ・1クォーターの小麦は、いろいろに違った割合の他の諸商品（靴墨・絹・金など）と交換される。
  - ⇒ これら他の諸商品は互いに置き換えられうる諸交換価値でなければならない。
  - 第1に、同じ商品の妥当な諸交換価値は「一つの同じもの」を表している。
  - 第2に、交換価値は、それとは区別される「或る実質」の表現様式でしかない。

■prg.7

- ・2つの商品（小麦と鉄）の交換関係がどうであろうと、この関係は、1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄、という等式で表すことができる。
  - ⇒ この等式は、「同じ大きさの一つの共通物」が1クォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも存在することを意味している。
  - ⇒ だから、両方とも「或る一つの第三のもの」に等しい。

■prg.8

- ・諸商品の諸交換価値は「一つの共通なもの」に還元される。

■prg.9

- ・この「共通なもの」は、自然的な属性ではない。
- ・諸商品の交換関係の特徴づけるのは、諸商品の使用価値の捨象である。

■prg.10

- ・商品は、使用価値としてはいろいろに違った質、交換価値としてはいろいろに違った量でしかない。

■prg.11

- ・商品体の使用価値を見ないことにすれば、商品体に残るのは労働生産物という属性だけ。
  - ⇒ 労働生産物の使用価値を捨象するならば、それぞれの具体的な労働は抽象的人間労働に還元される。

■prg.12

- ・これらの労働生産物に残っているのは、「まぼろしのような対象性」の他には何もなく、無差別な人間労働のただの凝固物の他には何もない。
  - ⇒ これらのものが価値——商品価値。

■prg.13

- ・商品の交換関係のうちに現れる「共通物」は商品の価値。

**【論点・疑問点】**

- prg.7で考察される小麦・鉄の2つの商品の関係は、prg.6で示される小麦と靴墨・絹・金などとの関係のうちの一部を取り出したものなのか。
  - ・prg.6とprg.7は如何なる関連にあるのか。
- 「それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。」(prg.7)
  - ・交換関係を除外してもなお、一つの等式で表すことができるのはなぜか。
- 「一つのもの」(prg.6)、「或る実質」(prg.6)、「同じ大きさの一つの共通物」(prg.7)、「或る一つの第三のもの」(prg.7)、「一つの共通なもの」(prg.8)
  - ・これらの関係はどのようにになっているか。